
高知のまちに「タウンモビリティ」を！

～高知市京町商店街におけるタウンモビリティ事業の取組～

NPO 法人福祉住環境ネットワークこうち
(「タウンモビリティ運営委員会」事務局)

1 はじめに

「タウンモビリティ」とは、タウン＝まち、モビリティ＝移動性であり、障害を持っても高齢になっても、誰もが出掛けたいと望む場所に出掛けられる、移動の権利を保障する仕組みです。1979年にイギリスのショッピングセンターで「ショップモビリティ」として、移動に不便を感じている方に車いすや電動スクーターの貸し出しを行ったのが始まりです。また、日本では商店街や街中の移動も楽しめるように「タウンモビリティ」という名称で、1999年に広島で始まったのが最初とされています。

当NPO法人は、障害者、高齢者が在宅で安心して暮らせるための福祉住環境整備を柱に取り組みしており、家だけでなく街も、誰もが利用しやすい環境を整えていきたいと願い活動しています。また、全国では同じ目標を共有出来る活動団体がゆるやかにつながり「福祉住環境ネットワーク会議」という会議体を築いています。その仲間である「NPO法人高齢者快適生活づくり研究会」が、福岡県久留米市で取り組まれているタウンモビリティをモデルとして学ばせて頂き、高知でも取り組んでいこうと実施したのが、高知での活動の始まりです。

現在では、「タウンモビリティ運営委員会」を発足し、当NPO法人、行政、専門職、商店街組合、障害当事者等、様々な立場の方が委員として参加し運営を行っています。

2015年4月末より、高知市中心商店街の空き店舗を活用してタウンモビリティの拠点となる「タウンモビリティステーションふくねこ」を開設しました。タウンモビリティステーションの実現のために実績を重ね、その必要性や効果を広く伝える活動や、現状のあらゆる課題の調査も行ってきました。今後は、持続的により質の高い運営を行うために、体制の見直しや人員・費用の確保にも取り組んでいきます。

今回、多くの方にタウンモビリティの取り組みについて知って頂き、そして高知の街を誰もが安心して出掛けられる、本当の意味での「あったか高知」と言える街にしていくために、ともに考え、ともに力を合わせていけたらと願っています。

最後になりましたが、この活動をともに支え歩んできてくださっている、高知市、高知県の関係各課、高知県社会福祉協議会、高知商工会議所、株式会社高知市中心街再開発協議会、各障害者団体、医療、福祉の各専門職団体、各NPO法人等、数えきれない皆さまのご理解とご協力に深く感謝致します。

2 これまでの経緯

2010年

<12月>

高知県・県社協主催の障害者週間の集い「ひとまちふれあいフェスタin高知」にて、障害者や高齢者の方に中心商店街へ出掛けてもらうためのイベントを開催。実行委員の構成は、障害当事者団体、高知市障害者福祉センター、高知市障がい福祉課、高知県障害保健福祉課、高知県社会福祉協議会、高知県立大学社会福祉学部、国際デザインビューティーカレッジ、NPO 法人福祉住環境ネットワークこうち、NPO 法人こうち音の文化振興会、帯屋町商店街青年部次世代グループ・・・等、多団体に及び、のちの取組みの多大なる協力者となってくださった。

2011年

<1月> 久留米市六ツ門商店街を見学

「タウンモビリティ」を実施して10年目(2014年現在)の商店街を見学。ひとまちふれあいフェスタ実行委員に賛同を得て、高知でも「タウンモビリティ」の実現を目指す。

<9月> タウンモビリティ研究・推進機構 白石正明氏が来高

タウンモビリティを日本に紹介した第一人者。アドバイスをいただく。

・9月18日 高知・タウンモビリティ第1弾実施(ラララ音楽祭内)



<11月> タウンモビリティ講演会を開催

講師：NPO法人高齢者快適生活づくり研究会 代表理事吉永美佐子氏（久留米市）

<12月> タウンモビリティ第2弾実施（ひとまちふれあいフェスタ内）

2012年

<9月> タウンモビリティ第3弾実施(ラララ音楽祭内)

<11月> タウンモビリティ継続のため、行政を訪問

高知市障害福祉課・商工振興課、高知県障害保健福祉課・商工労働部、各担当者に取り組みの説明、協力依頼。高知県知事との面談が実現。

<12月> タウンモビリティ第4弾実施(ひとまちふれあいフェスタ内)

高知県・高知県社協主催の障害者週間の行事として取り組みは、3年目のこの年で終了。

2013年

1月～ タウンモビリティ継続開催を開始

土佐セレクトショップてんこす前にて、毎月第2土曜日に開催。車いす、シルバーカー、ベビーカーの無料貸出し。買物の付き添いボランティア（有料）を実施。

<2月> 「誰もが出掛けられるまちへ」講演会を開催

行政、商店街、運営NPOの立場からタウンモビリティの必要性や効果について発信した。



・2月23日 久留米市のタウンモビリティを視察

高知県障害保健福祉課、高齢者福祉課担当者に同行し、久留米市商工観光労働部商工政策課担当者、久留米市ほとめき商店街会長、運営NPO代表と面会し、説明を受ける。



2014年

<4月> 高知市副市長と面談

タウンモビリティ継続のために中心商店街への拠点の設置、運営費の捻出について協力依頼を行った。

5月現在

（名簿登録者数）スタッフ21名、ボランティア115名（内、学生が8割）、利用者60名。中心商店街への「タウンモビリティステーション」の常設を目指して活動中！

3 取組の成果

報告 1

✓タウンモビリティ利用者が増えています。

(出掛けられる場が増える、友達と会える、生きがいの場として)



報告 2

✓ボランティアが増え、登録者100名を超えました。

(実践の体験学習の場、UD意識の向上につながる場として)



報告 3

✓中心商店街関係者の理解、協力の輪が広がっています。

1. 土佐セレクトショップ てんこす → 月に1度会場提供
2. ホームラングループ → 車椅子等の保管場所の提供
3. 商店街組合、高知市中心街再開発協議会 → 広報、商店主への呼びかけ等の協力



報告 4

✓中心商店街の中のバリアに気付き、その改善に役立っています。

高知よさこい情報交流館

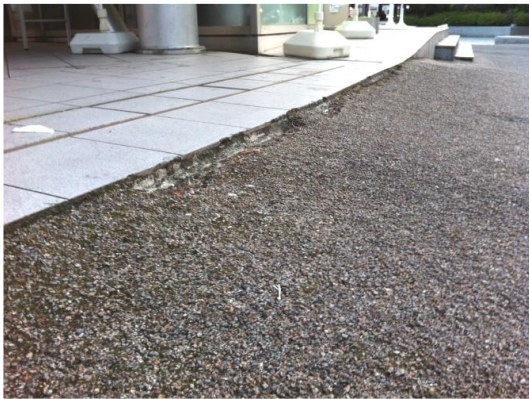
市の観光振興課に不便な箇所を提案して改善して頂きました。



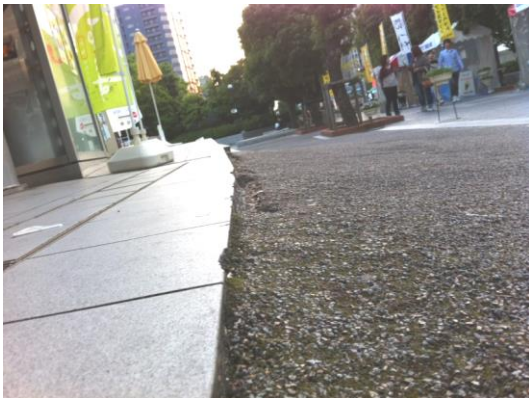
土佐セレクトショップ てんこす

市のみどり課に危険な箇所を提案して改善して頂きました。

改善前



改善後



報告5

✓障害当事者もボランティアとして参加。人の役に立つこと、自分の役割がある「居場所」を見つけたことが喜びに。

○知的障害者の方

・高齢者の話し相手や車いすの介助をすることが生きがいとなり、グループホームに就職されました。

○脳血管障害で片麻痺の方

・参加する同じ障害を持つ方にピアサポートを行い、学生ボランティアに体験からの思いを話し、育てていってくれています。



報告6

✓観光客の利用にも役立っています。

✓高齢の方も家族と一緒に高知の街を楽しんでいます。

ひろめ市場で孫と一緒に
ご飯を食べたよ！



報告7

✓必要としている情報につなぐ相談窓口の入口となる情報拠点として。

車椅子で利用できるトイレは？
バリアフリールームがあるホテルは？
自分の障害を相談出来る場所は？
介護認定はどこで受けられるの？



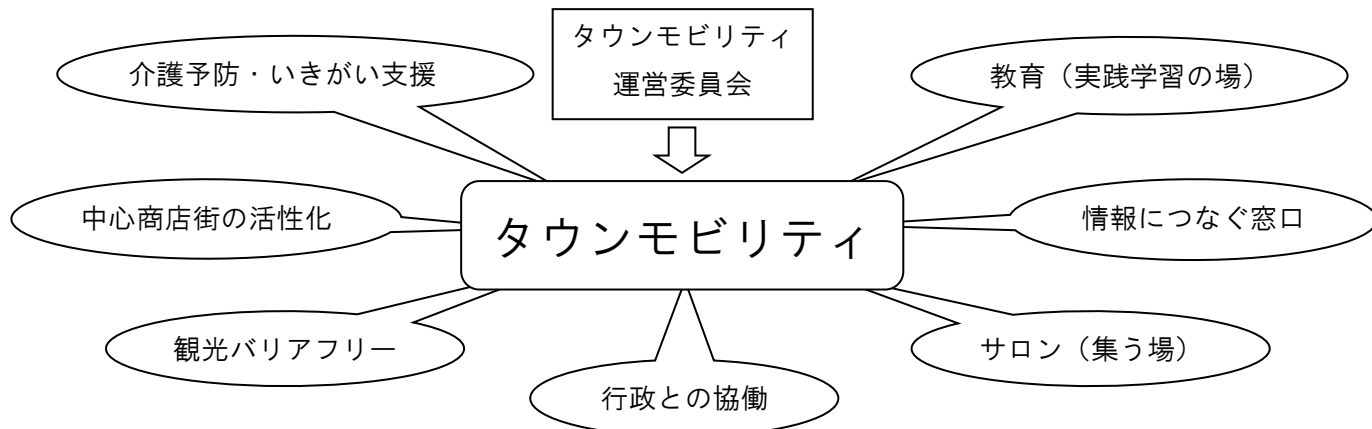
出来るだけたくさんの相談機関の紹介
や、情報を置いています。



4 「タウンモビリティステーション」の常設を目指して

1) 「移動のサポート」だけではない効果とは

高知でのタウンモビリティの活動から、中心商店街で「移動のサポート」を行うだけが目的ではなく、高知のまちを笑顔にする効果が広がってきている。



中心商店街の活性化

平成 25 年度の利用状況と、久留米市の取り組みを参考に利用者の買物金額を聞き取り記録し、商店街で買物や食事等どれだけ利用しているか、タウンモビリティが商店街活性化に繋がっているかを調査した。

金額は利用者（全員ではなく記入者のみ）の集計だが、その 3 倍以上の人数のスタッフ・ボランティアも買物や食事をしていることを考えると、昨年度は約 100 万円近い経済効果があったと考えられる。

タウンモビリティ利用状況（H25 年度）

開催日	利用者	買物金額	スタッフ(S)・ボランティア(B)	同日開催イベント
H25 年 4 月 13 日	3 名	約 5,000 円	S : 9 名 B : 5 名	
5 月 11 日	5 名	約 9,000 円	S : 8 名 B : 12 名	童謡教室
6 月 8 日	17 名	約 11,000 円	S : 9 名 B : 17 名	童謡教室
7 月 13 日	6 名	約 13,000 円	S : 9 名 B : 9 名	童謡教室
7 月 27 日	4 名	約 8,000 円	S : 6 名 B : 13 名	土曜夜市
8 月 11 日	※県外からの車椅子貸出し希望：1 名		S : 7 名 (内、障害当事者：3 名)	よさこい祭り バリアフリー調査
9 月 15 日	9 名	約 10,000 円	S : 10 名 B : 14 名	高知街ラララ音楽祭
10 月 12 日 ※公共交通サポート	15 名	約 32,000 円	S : 9 名 B : 11 名	童謡教室
11 月 9 日 ※公共交通サポート	7 名	約 65,000 円	S : 10 名 B : 20 名	童謡教室
12 月 8 日	7 名	約 35,000 円	S : 9 名 B : 12 名	じんけんふれあいフェスタ
H26 年 1 月 11 日	4 名	約 8,000 円	S : 10 名 B : 21 名	童謡教室
2 月 8 日	11 名	約 12,000 円	S : 10 名 B : 22 名	童謡教室
3 月 8 日	17 名	約 60,000 円	S : 11 名 B : 24 名	土佐のおきやく
H25 年度利用 延べ人数・総額	127 名	約 268,000 円	S : 117 名 B : 180 名	

行政との協働

タウンモビリティを継続していくためには、行政の協力が不可欠である。タウンモビリティは収益を生み出せる事業ではないが、お金には替えられない「街や人を育てる事業」である。民間と行政がお互いの得意分野を持ち寄りながら根付かせていく努力が必要となる。現状の施策にもタウンモビリティと目標を共有出来る取り組みがある。連携を取りながら推進していくことが大切だと考える。

「はりまや橋周辺から高知城までの東西軸エリア活性化プラン」

高知市・高知県が合同策定。「来街者にやさしい商店街づくり」への取り組みも盛り込まれている。

「観光バリアフリー事業」

高知県障害保健福祉課の担当事業。観光客の高齢者、障害者へ配慮した施設、接客を充実させていく。

「バリアフリー推進事業」

高知TMOが運営。誰もが安心して出掛けられる街を目指し、現状調査、行政と連携し改善支援。

2) 実現のために必要なこと

中心商店街にタウンモビリティステーション（拠点）が出来ることで、移動のサポートを行うだけでなく、専門知識を持つスタッフ（理解者）がいること、集う場があること、情報があることが、障害者、高齢者、子育て世代が街へ出掛ける魅力になる。出掛ける方が増えれば、街が変わり、誰もが安心して利用できる中心商店街の実現につながると考えられる。

<短期目標>

タウンモビリティの活動やその効果について広く周知を行い、利用者増を目指す。
現状調査を実施しニーズを理解した上で、継続運営が出来る体制を整えていく。

<中期目標>

行政、商店街等関係機関との連携を深め、月に1回から開催頻度を増やしていく。

<長期目標>

街に「タウンモビリティ」があれば、笑顔が増える！誰もが笑顔で暮らせる高知を実現するために「タウンモビリティ」を、高知に住む皆とともに育てていく。

5 タウンモビリティステーションふくねこの開設

2015年4月末より、高知市・高知県から支援を頂き、高知市中心商店街の空き店舗を活用して「タウンモビリティステーションふくねこ」を開設しました。



タウンモビリティ拠点施設の開所を祝うスタッフら
(高知市の京町商店街)

買い物支援 週3日に 高知市のタウンモビリティ

障害のある人や高齢者に車いすを無料で貸し出すなどして買い物を楽しんでもらう「タウンモビリティ」の県内初の拠点施設が29日、高知市はりまや町1丁目目の京町商店街に開設された。同市内での活動はこれまで月1回だったが、拠点施設の開設で週3日に。運営を担うNPO法人「福祉住環境ネットワークふくねこ」は、「買い物を通じている人が一歩踏み出す手助けを届けたい」と意気込んでおり、30日から活動を始める。

県内初の拠点始動 京町商店街

「ネットワーク」が利用。「日曜日に行きやすい」「平日も利用したい」との要望が出たことから、県と市の補助を受け、活動を拡大することにした。

新たな拠点は、播磨屋橋に近い京町商店街の「タウンモビリティ」が利用。「日曜日に行きやすい」「平日も利用したい」との要望が出たことから、県と市の補助を受け、活動を拡大することにした。

新しい拠点には、シルバーカー、ベビーカーを貸し出すほか、付き添い支援、車いすで利用できるトイレや店舗の紹介を行う。電話や手話教室などの交流イベントも企画する。

29日の開所式では、同NPOの笹岡和泉理事長が「観光客も利用しやすい場所に開設できた。一緒に活動を育てていきたい」とあいさつ。コンサートなどで祝った。

大型連休中の4月6日も利用できる。付き添い支援は事前予約が必要。問い合わせは福祉住環境ネットワークふくねこ（080・39233・2939）へ。

(門田朋三)

(高知新聞 2015.4.30 記事より)

開所時からのデータ (4/30~8/31)

※人数表示は延べ人数です。

期間中の開所日数	69日	シルバーカー貸し出し	2人
来訪者	584人	ベビーカー貸し出し	18人
付き添いボランティア利用	44人	参加スタッフ	201人
車いす貸し出し	18人	参加ボランティア	150人

来訪者の内訳

タウンモビリティステーションふくねこへの来訪者は、以下の3つに大きく分類できる。

「タウンモビリティに情報やサポートを求めて来られる方」 (高齢者・障害者・観光客など)	約70%
「タウンモビリティを何か出来る事で手伝いたいと来られる方」 (一般の方、障害当事者も含む)	約20%
「お互いにメリットがある形での連携を求めて来られる機関」 (市社協・障害者福祉センター・行政・大学など)	約10%

ステーション定例行事

- ・毎月第2土曜日◆童謡教室
- ・毎週木曜日◆脳卒中当事者コミュニティカフェ「脳☆天気」／「みんなあが先生プロジェクト」
- ・毎週金曜日◆就労支援事業所オーシャンクラブ「パティスリー・ラヴィエール」洋菓子販売
- ・毎月第4土曜日◆（公社）高知県建築士会 女性建築士による「いたわり住宅相談会」

他団体と連携した活動実績

- ・6/20◆エスコーターズ接遇研修（主催：高知商工会議所）
- ・7/19◆高知大学フィールドワーク（主催：高知大学地域協働学部）
- ・7/31◆タウンモビリティ見学・体験（主催：網膜色素変性症協会高知県支部）
- ・9/19◆木材協会と高知県建築士会青年部会とこうち健康・省エネ住宅推進機構の交流会
（主催：こうち健康・省エネ住宅推進機構）
- ・9/20◆高知街ラララ音楽祭 2015 にてスタンプラリーポイント協力（主催：同実行委員会）
- ・9/29◆障害者サポート研修（主催：高知県障害保健福祉課）
- ・11/21◆はじめてのボランティア講座（主催：高知市社会福祉協議会）

効果

- ・拠点が出来たことで買い物弱者が安心して立ち寄り、サポートを求められる場になっている。
- ・中心商店街でのバリアフリー情報（トイレ・店舗等）を集約し提供して喜ばれている。
- ・行政・社協・大学などがユニバーサルデザインなまちづくりの取組みに活用している。
- ・商店街（商工）、観光、福祉など広く情報のステーションとしての利用増。連携の機会の増。
- ・県外からの観光客の利用あり。（今後、海外からの観光客の利用の可能性もあり）
- ・障害当事者が役割を持ち、生きがいを感じられる場になっている。
（例：脳卒中、その他の障害当事者が、それぞれの得意を活かしてお互いに先生になりあう「みんなあが先生プロジェクト」を7月より実施）
- ・他団体のステーション利用では、会場使用料として協賛金を頂いており活動資金となっている。

課題

- ・ステーション運営のための常駐人員の不足。
- ・現状の収益（活動収益と寄付）では、人件費を支払えない状況。
- ・リピーターは定着しているが、新たな利用者増に繋がる取組みがさらに必要。
- ・公共交通利用のサポートは行っているが送迎を行えていないため、重度心身障害の利用希望者が諦めざるを得ない状況になっている。

改善に向けての取組み

- ・タウンモビリティを必要としている人に出掛ける一歩を踏み出してもらうため、情報発信の仕方、広報先の見直し、拡大。
- ・スタッフ・ボランティア不足の改善のため、他のボランティア団体、行政、社協、各学校等への協力依頼を行い、運営システムの改善に取り組む。
- ・医療・介護・福祉・商工・観光・行政など幅広い層に関心を持ち、この場を「ともに」育ててもらうための連携先の拡大。
- ・ボランティアでの取組みとしては業務量も増えてきており現状のままでは継続が難しいため、行政に来年度

には常駐職員の日当を含めた人件費の検討をお願いしていく。

- ・補助金だけに頼らず運営していくために、商店街・行政・NPO がお互いにメリットのある形でともに取り組める収益事業の企画。

地域包括ケアシステムの実現のために

- ・地域を支える民間力（ボランティア・NPO 等）として重要な役割である要介護高齢者・障害当事者が、地域の中で役割を持つことで生きがい・介護予防につながることはタウンモビリティでも実証出来てきている。要介護高齢者・障害当事者が社会資源となりうることの発信の1つとして、この取組みの充実のために国の支援策として予算化が出来ないか提言していく。

<タウンモビリティ活動を応援、ご協力頂ける方はご連絡ください>

- ・スタッフ（経験者）、ボランティアとして活動にご参加頂ける方
- ・障害者、高齢者、移動に不便を感じている方のご利用
- ・活動へのご寄付、又、拠点となる場所を提供して頂ける方

◆運営主体◆

NPO 法人福祉住環境ネットワークこうち「タウンモビリティ運営委員会」

TEL : 080-3923-2939 (担当 : 笹岡) FAX : 088-855-4620

Mail : townmobility-kochi@softbank.ne.jp

◆ タウンモビリティステーションふくねこ風景 ◆



ステーション外観



学生ボランティアの参加



重度心身障害児(者)が、街で休養できる場



ベビーカー利用のニーズが高い



毎月定期開催の「童謡教室」の様子



街なか集える場・サロン機能

参考資料1) 新聞への活動掲載

●2010年12月6日掲載 (高知新聞)
開催当日の様子



●2011年12月5日掲載 (朝日新聞)
開催当日の様子



●2013年1月9日掲載 (高知新聞)
継続開催のお知らせ



●2013年1月13日掲載 (高知新聞)
開催当日の様子



参考資料2) 中心商店街にある車いすで使用出来るトイレ調査報告 (2013年現在)

中心商店街へ出掛ける際に、障害者、高齢者の方が一番不安を訴えるのが「トイレ」である。既存のマップにもトイレ情報は掲載されているが、「車いす対応」と書かれていても、障害の度合いによっては使用出来ないトイレもあったため、独自で調査を行いマップを作成した。自分の身体の状態に合ったトイレを選んで、安心して利用できるようにトイレの画像も掲載した。タウンモビリティを利用する方の案内に活用している。

高知市中心商店街トイレマップ

1 藤並公園

2 帯屋町公園

3 追手前高校前

4 城東公園

5 中央公園

6 追手前公園

7 テンテツターミナル

8 ひろめ市場

9 毎日屋

10 やまももセンター1F

11 メフィストフェレス

12 ローソン大橋通り

13 高知公園道店

14 帯屋町店

15 中央公園店

16 廿代橋店

17 はりまや町3丁目店

18 はりまや町1丁目店

13~18のコンビニエンスストアは、車いす対応トイレではないが、全店洋式トイレなので、立位歩行できる方は利用できます。ほぼ全箇所に、手すりが設置されています。

本館	東館
5階	6階
4階	5階
3階	4階
2階	3階
1階	2階
BF	1階
	BF

19 車椅子トイレ
高知大丸

20 洋式トイレ
高知大丸

21 車椅子トイレ
メガネのクスノセ

車いす可でも広さがなく狭い箇所もあり。車いすトイレは、各階により使い勝手が違う。その他のトイレは和式・洋式どちらもあり。

洋式は無く、和式トイレのみ
途中段差あり、車いす移動は難しい

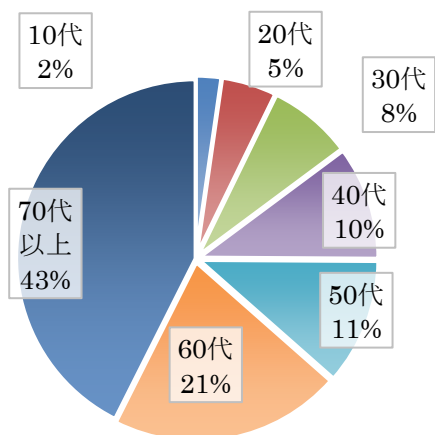
高知大丸

トイレ前の通路に階段がある箇所もあり。

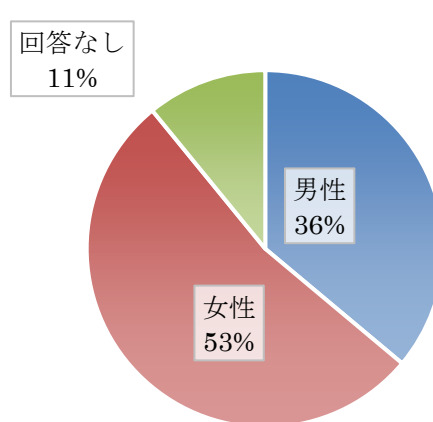
参考資料3) 外出に関するアンケート調査 (2013~2014年)

障害者や高齢者等、移動に不便を感じている方を対象に「外出に関するアンケート」調査を行った。その結果、出掛けたいと望む声は多く、中でも人との交流を求めている意見が多いのが特徴的だった。また、街のバリアフリー化、利用しやすい公共交通、障害への理解を望む声が多かった。(回答者数 266)

●回答者の年齢

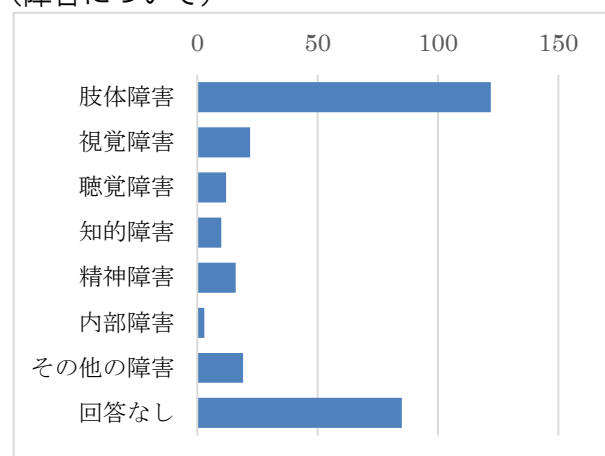


●男女の比率



●身体の状態

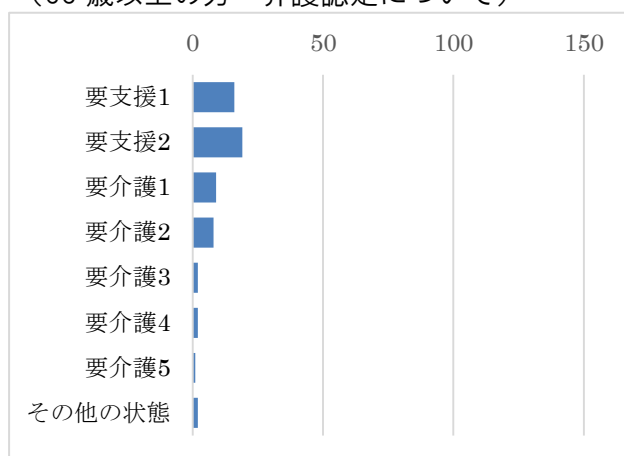
(障害について)



○その他の回答…

難病、体幹の機能、パーキンソン病
多系統萎縮症、発達障害、高血圧、自閉症等

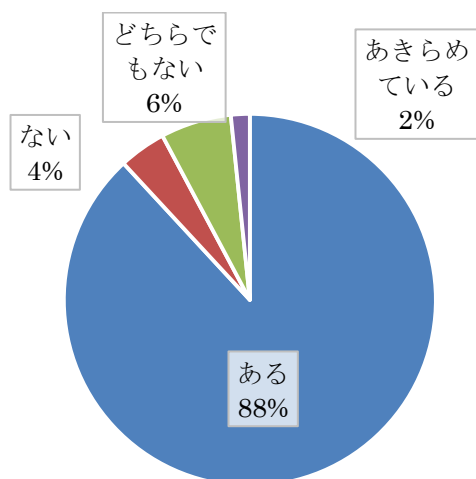
(65歳以上の方 介護認定について)



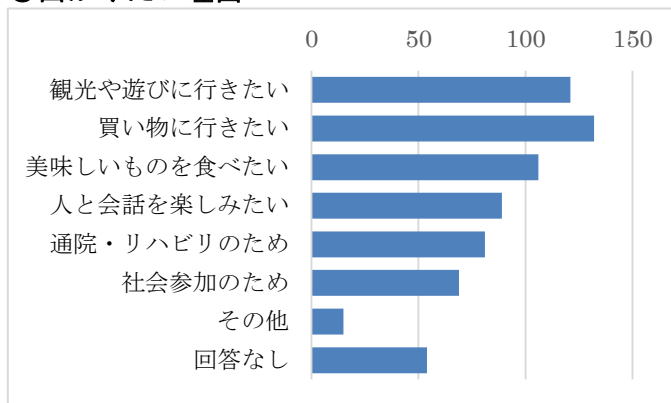
○その他の回答…

坐骨神経痛、高血圧、腰痛、ひざ痛等

●出かけた希望



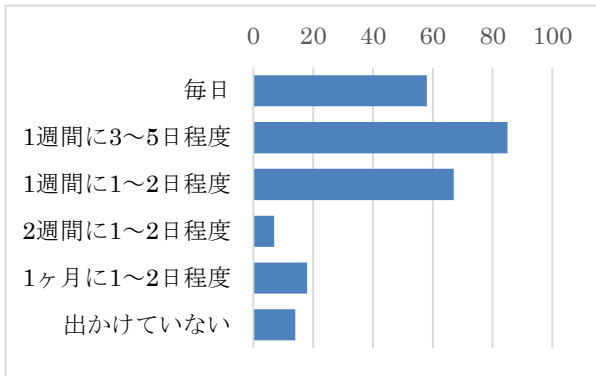
●出かけた理由



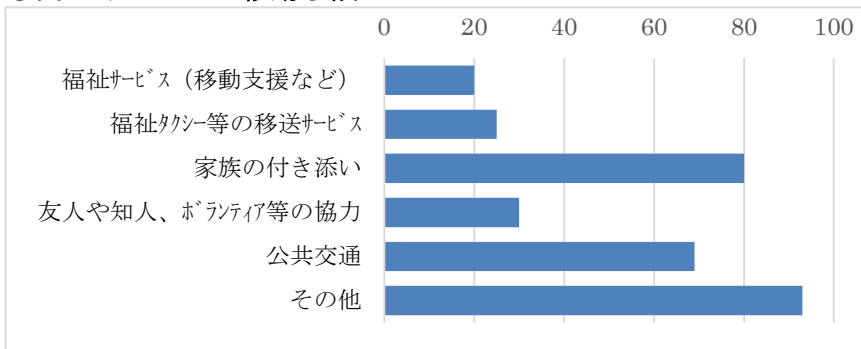
○その他の回答…人とのつながりを持ちたい。

季節の移り変わりを感じたい。等

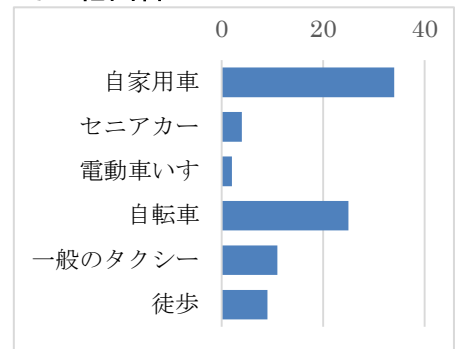
●現在の外出頻度



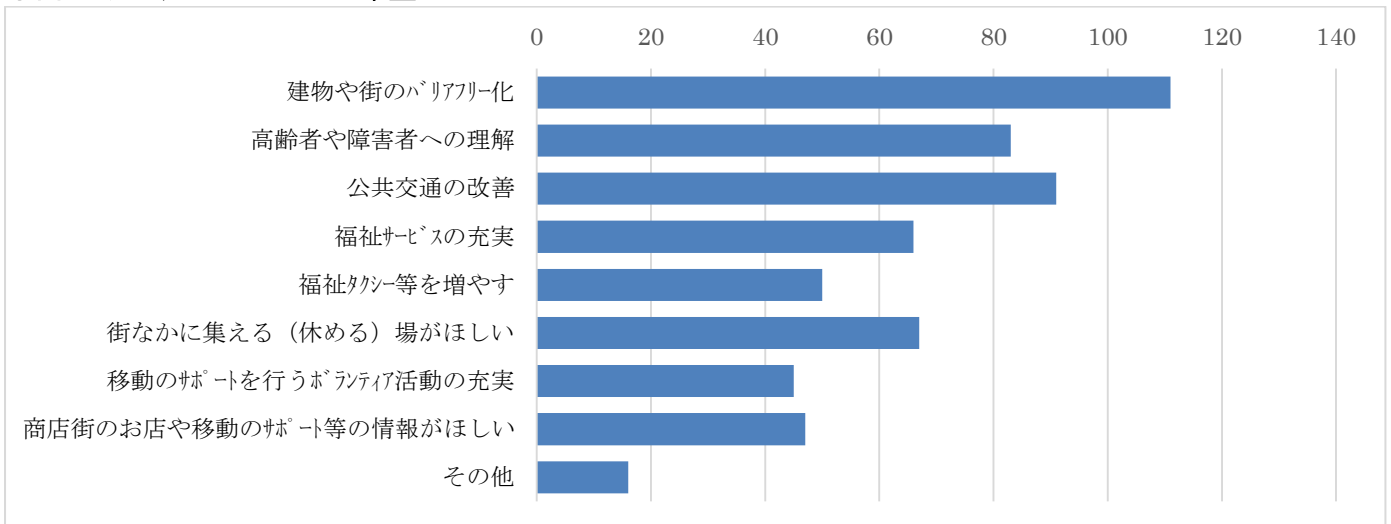
●出かけるときの移動手段



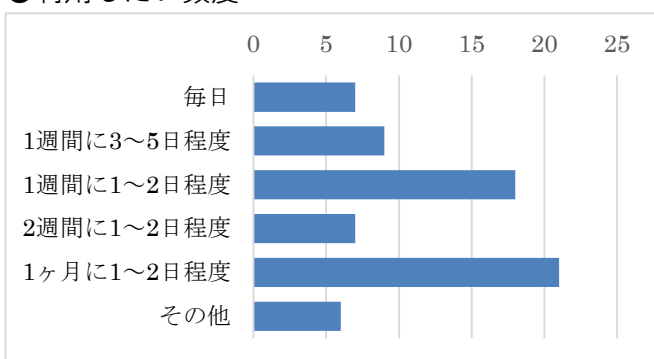
●その他回答



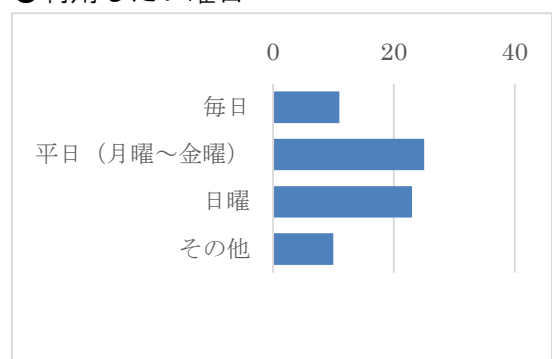
●出かけやすくなるための希望



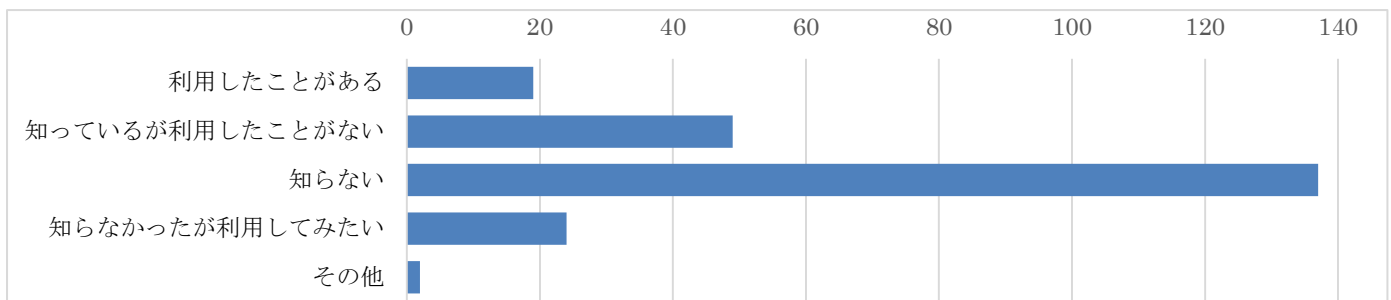
●利用したい頻度



●利用したい曜日



●タウンモビリティの周知



●その他、「誰もが出掛けやすくなるための」ご希望やご意見（回答者数 53/275）

<タウンモビリティ>

- ・タウンモビリティが常設できればいいですね。
- ・現在軽度の障害があります。ボランティア側で登録しておいて、自分が必要になれば利用したい。
- ・情報が必要な方に届いていないので、情報を届けるようにしてほしい。
- ・サポートさんが自分のすぐ近くにいることが安心。利用しやすい制度。
- ・タウンモビリティの情報を、あかるいまちに載せてほしい。よろしくお願いします。

<人との交流>

- ・心のバリアフリー、ボランティアされる人とする人とのコミュニケーションが大事と思う。
- ・身体障害者が懇談できるグループが身近にあると参加でき、情報も得られ、又生きていくための意欲も出るのではと思いますが、そんなグループがあるかどうかよくわからない。
- ・気軽に声をかけやすい優しい気持ちの人が増えてほしい。

<まちの環境>

- ・町中にベンチがあればいいと思う。
- ・肢体障害ですが、大人でもおむつを替えられる大きいベッド付きのトイレがあればと思います。
- ・出かけるときに利用できるサポート内容を記した手帳の配布
- ・子供が人工呼吸器を使用しています。移動時、電源の確保が気軽にできるところがあれば、少し安心して外出できると思います。
- ・きれいなトイレ、街や建物のバリアフリー化

<公共交通への意見>

- ・公共交通、例えばバスや電車を全てバリアフリーにした方がよいのでは。
- ・低床バスの便数が増えてくると、たとえ車いすであったとしても出掛けやすくなると思う。
- ・介良地区はバスの回数が少なくなりましたので、もう少し増やしてもらいたいです。
- ・今の住所に住み始めた時は市内循環バスがあったのですが、今はなくなり大変不便です。
- ・バスの車内アナウンスが聞こえにくいので大きくしてほしい。
- ・利用しやすい値段の交通機関・駐車場
- ・自走式車椅子や電動車椅子で利用できる公共交通
- ・太陽号等のような乗降時にステップが出てくる車両、ノンステップバスの充実
- ・高齢者にとって公共の交通費をもっと安値にしてほしい。

高知新聞夕刊に2015年9月28日~10月3日まで、現在の「タウンモビリティステーションふくねこ」の活動が6回連載で掲載されました。

「ふくねこ」の風景

高知のタウンモビリティ ①

南国市岡豊町中島の山崎豊さん(44)が突然倒れたのは、2007年の秋だった。当時は民間企業の営業職。接待の飲み会で意識を失い、救急車で運ばれてしまふ。脳出血と診断された。あれから8年。左半身にまひが残る山崎さんはいま、福祉作業所で働く。そして毎月1回、作業所の同僚と一緒に高知市の中心街を訪れる。

車いすに乗り、押しこまれるボランティアと冗談を交わしながらアーケード街を進む。記者が同行した日の昼食は「帯屋町チェントロ」2階のレストランだった。

可能性

外へ出て、街を楽しみたい

つえを持つ弘田寿栄さん(中央)と付き添いのボランティアがアーケードを歩く
(高知市はりまや町1丁目)

た。「僕はだいたい、おしゃべりやき。(街に来るのは)いろいろな人としゃべるのが目的やね」

かつての街の様子、仕事の中身、学生ボランティアのこと…。話はほんほん進んだ。

高知市南御座の弘田寿栄さん(38)は生まれた時から目が見えない。マッサージ師として病院で働いている。お酒が好きで、なじみの店には1人で通う。山登りも楽しむという。そんな弘田さんも、慣れない場所は1人で歩きにくい。

ほんの少しの支えを支えに

暑さが残る午後、弘田さんはボランティアに先導してもらい、商店街を歩いていた。ボランティアの肩に手を置き、人混みを行く。買い物はしない。京町商店街からひろめ市場までを往復した。

「ただ歩くだけで楽しいですよ。気分転換にもなりますし。1人で街を散策するのは難しいので」

山崎さんも弘田さんも、京町商店街の「タウンモビリティステーション ふくねこ」を拠点にして街に出る。

「ふくねこ」は4月末、空き店舗を利用して開所した。

外出して、買い物や食事を楽しむことを促し、家に閉じこもりがちな障害者や高齢者に生きがいを持ってもらうことが「タウンモビリティ」活動の目的だ。1979年に英国で始まり、日本でも拡大。99年からの広島市、2002年からの福岡県久留米市などが先進例になった。

「ふくねこ」は、運営するNPO法人「福祉住環境

ネットワークこうち」の略称だ。自力で歩くことが困難な人が来て、街を楽しめるようにしている。

無料貸し出し用に車いす15台、シルバーカー15台、ベビーカー2台。予約すれば、1回500円でボランティアの付き添いを受けることもできる。

同法人は、13年1月から中央公園脇のアンテナショップ「てんこす」で月1回の活動を始めた。京町商店街に拠点を移した今春からは、活動日を木曜から日曜までの週4日に拡大。8月末まで69日の開所して延べ600人近くがここを訪れた。

障害者や高齢者には、1人でできないこともある。逆に、ほんの少しの支えがあるだけで、驚くほどいろいろなことができる。そのことに多くの当事者も気付いていない。

自分の可能性をまだ知らない人の背中をそっと押すのが「ふくねこ」だ。初夏から秋、そこに集う人々を追ってみた。

(報道部・楠瀬健太が担当し、6回連載します)

(高知新聞 2015.9.28 記事より)

高知市中心街のアーケードを車いすに乗った吉本浩子さん(51)が進む。後ろから学生ボランティアが押す。2人の会話は途切れず、実に楽しそうだ。

「もっと前はね、帯屋町も(こ)ちゃ(こ)ちやしちよったよ」「あ、ごめん、宝くじ買ったよ、寄ってくれん？」
吉本さんは約25年間、保育士として働いていた。職場で倒れたのは2011年3月のこと。脳出血で左半身にまひが残った。

前向きに

楽しみは自分で見つける



ボランティアと談笑しながら車いすで街を楽しむ吉本浩子さん(高知市帯屋町1丁目)

「すごい、シヨックやったよ。でも、前向きにならんといかんと思うた」
もともと旅行が好きだった。「家におるのが好きやなかった」と言う吉本さんは、リハビリなどに積極的に参加し、同じ障害がある仲間と語り合った。
一昨年の暮ころ、中央公園協会のアンテナシヨップ「てんこす」で行われていたタウンモビリティ活動を知り、外出の機会が増えていく。京町商店街に「タウンモビリティステーション」
「何でも(ボランティア)にお任せじゃいかんと思ってる。車いすを押ししてもらっている間も、吉本さんは気を抜かない。
「私もまた役に立つがやうな、生きた教材やなってる。」
「すごい、シヨックやったよ。でも、前向きにならんといかんと思うた」
もともと旅行が好きだった。「家におるのが好きやなかった」と言う吉本さんは、リハビリなどに積極的に参加し、同じ障害がある仲間と語り合った。
一昨年の暮ころ、中央公園協会のアンテナシヨップ「てんこす」で行われていたタウンモビリティ活動を知り、外出の機会が増えていく。京町商店街に「タウンモビリティステーション」
「何でも(ボランティア)にお任せじゃいかんと思ってる。車いすを押ししてもらっている間も、吉本さんは気を抜かない。
「私もまた役に立つがやうな、生きた教材やなってる。」

高速バスで京都へ行きたい

吉本さんの周囲には「こんな体を見せるのは恥ずかしい」と外出を誘う人も多い。
でも、と吉本さん。
「障害者ほもつと街に出て行って、困ったことがあったら『助けて』って言えばいい。楽しいことは自分で見つけんといかん」
この夏は、よさこい祭りの囃子踊りに車いすで初参加した。
「暑いより楽しいが先立つてね。(もらった)メダルも持ち歩きゆう。うれしがりやき」
やってみたいことはたくさんある。
「山登り。高い山にもようぼんき、つえを突いて行けんろうか。試してみたいのは高速バス。京都に行きたい。好きながよ」
自宅のある高知市横浜から中心街へ、さらにその外へ。積極性は誰にも負けないつもりだ。
(報道部・楠瀬健太)

(高知新聞 2015.9.29 記事より)

ある木曜の午後、高知市の京町商店街。

「タウンモビリティシステム」フクネコを訪ねると、利用者らスタッフの計5人が机を囲んでいた。全員、障害がある。

「障害者は『リハビリに行く』って言うろうや？ いやなくて、いかに生活の中に組み込めるリハビリをやるかよ」

そう問い掛けたのは香美市土佐山田町から来た福島富雄さん(58)だった。別の男性が「リハビリ、

社会資源

感謝の言葉を言われる障害者に



福島富雄さん＝中央＝を中心に「ふくねこ」で開かれる「脳☆天気」の様子（高知市はりまや町1丁目）

行ったことない。一度も」
と応じた。
「全然？」
「全然。自分で何とかせないかんと思って（生きてきたから）」
他の参加者が驚いたよう
に会話の行方を見守り、やがてその輪に加わった。
□ □ □
毎週木曜日、ここでは「脳☆天気」という交流会が開かれる。脳卒中や脳性まひなどの当事者が障害の

必要とされることがうれしい

種別を問わずに集まり、経験を語り合う場だ。中心は福島さん。自らも2002年に脳出血を患い、右半身のまひなど後遺症がある。福島さんの言葉は力強く響く。
「自分を肯定することが大事」「人からほめてもらわなきゃいかん自分は、弱い」「障害者も学ばなきゃいかん」
福島さんは地元の香美市でも脳卒中を患った人の交流会「Yes☆脳」を主宰してきた。「ふくねこ」開所を機に運営スタッフとして参加し、高知市でも同様の交流会を開くことにしたという。

「ここに集まって出会うことによって、場ができていく。人を変えていく」
そんな信念がある。
□ □ □
「脳☆天気」には既に「卒業生」もいる。初回から参加している高知市堺町の唐岩栄一さん(64)。脳卒中の後遺症を抱

えつつ、7月から「ふくねこ」で島をうり作りの教室を始めた。
「教えることで、島をうりを作る人ができたら、と。仲間を増やしたい」
その姿を見て、福島さんはこう言う。
「人間って変わるもんやにやあ。(唐岩さんは)あんまりしゃべる方やなかった」
福島さん自身、よくしゃべる。
「『ありがとう』と言われる障害者を増やしたい」
「障害者も社会資源」
そして――

「(障害者を)かわいそうという目で見てほしくない。僕が一番うれしいのは、誰かに必要とされることよ。僕らは、障害のことを話すことによって役に立ちたいわけよ。君は、こんな社会資源になれんろう？」

記者は、笑顔の福島さんからそう問われた。
(報道部・楠瀬健太)

(高知新聞 2015.4.30 記事より)

高知市の京町商店街にある「タウンモビリティステーション ふくねこ」。同市瀬戸に住む前田梢さん(34)は「ここに来ると、通りに面した場所で車いすに座り、道行く人に笑顔で声をかける。」

「こんにちは」
時々、立ち止まってくれる人がいる。そんな時は「ふくねこ」の活動を説明する。
さながら「ふくねこの看板娘」だ。

自分発信

低床バス停留所へ1時間



「ふくねこ」の前で、街に行く人に声をかける前田梢さん(高知市はりまや町1丁目)

生まれた時から脳性まひを患う前田さんは、下半身と右肩から下がまひし、車いすで生活している。月曜から木曜までは同市越前町の福祉作業所で働き、金曜から日曜は「ふくねこ」の常駐スタッフになる。

通勤手段はバスだ。毎朝、翌日の乗車を予約する。利用可能な低床バスは、自宅近くに停車しない。そのため最低で30分、日によっては1時間かけて指定のバス停へ行く。乗車の際には運転手がスロープを出し、車いすを押し上げる。女性の運転手さんが持っていたお客さんが手伝ってくれたこともありましたが、そんな大変な思いをしなから、なぜ毎朝バスを乗るのか、前田さんは「自分がガンガン(バスに乗ることで周りの人にも、乗れるよ、もつと(外に出られるよ、って伝える)たいんです」前田さんはもとも「ふくねこ」のスタッフではないが、13年前から商店街での買い物などで付き添い支援を利用するようになった。そのころは、市内中心部への移動をNPO法人の送迎に頼っていた。

考えが変わったのは13年だったという。この年、のちに「ふくねこ」の運営を担うNPO法人「福祉住環境ネットワークうち」が障害者の公共交通利用を調査し、前田さんにはモニターとして路線バスを利用した。

「乗れる、出られる」伝えたい

「乗れたという経験をしたことで、送迎に頼るのはいかによな、って」

付き添い支援の頻度が増えていくうち、前田さんは、スタッフの元気な働きぶりに気付いたという。

昨年6月から運営を手伝い始め、今年4月の「ふくねこ」開所からはNPO法人の理事になった。理事仲間の一人はこう振り返る。

「梢ちゃんも最初、まちづくりまでは考えていなかったけど、『ふくねこ』に集まる中で変わったね」

前田さんは今、新聞やウェブサイトに積極的に投稿している。車いすでバスに乗ったことやコンサートを楽しんだことなど外での出来事が中心だ。

「バスに乗ることが発信。自己満足かもしれませんが、出てくる人が多くなったら街もにぎやかになるんじゃないでしょうか」

(報道部・楠瀬健太)

(高知新聞 2015.10.1 記事より)

学生たち

「タウンモビリティ登録者」は、約100人のボランティア登録者がいる。そのうち学生は80人と多い。高知市東雲町に住む横野綾さん(18)もその一人だ。

帯屋町商店街がにぎわっていた土曜日の夕方、横野さんは利用者と一緒にアーケード街へ出た。談笑しながら車いすを押ししていく。押し方が少しきこちなく見えたと、笑顔と会話は途切れない。

ボランティア活動で学ぶ「対等」



「ふくねこ」でボランティアとして活動する横野綾さん(高知市帯屋町1丁目)

横野さんは「ふくねこ」開所時からボランティアとして活動している。兵庫県出身。社会福祉士と介護福祉士の資格取得を目指してこの春、高知県立大学社会福祉学部に入學した。

「人と関わる仕事でした。ボランティアが率直に話を始めた当初は、自分が(障害者を)助けなければという考えがあった。それに気付いて、自分で嫌になったことがあるという。

障害者を色眼鏡で見ないか。自分とは関係ない存在と思っないか。そんな悩みが、頭の中でぐるぐるしたこともある。

「ふくねこ」の活動は一方通行ではなく、利用者もボランティアが率直に話し合う。そんな経験を重ね、横野さんは「ここでは両者が同じように意見を出し、街を変えていこう」という強い意識を感じたという。

「皆さん笑顔で。元気をもらえる。やれること、居場所ができました」

「ふくねこ」の活動に関わる中、新たな活動に乗り出した学生ボランティアもいる。

「今までなかった視点を知った」

高知大学人文学部の2年生、岩瀬誠司さん(20)と鈴木舞香さん(20)。2人は京町商店街にある「学生活動交流館」を利用した実習科目を履修し、その一環で中心街の「福祉マップ」作りに取り組み。車いすでも利用できるトイレ、動線に十分な広さがある店舗、筆談器がある店などを掲載するという。

岩瀬さんは「『街に来たくても、来られない人がいる』という視点は僕にはなかった。誰もが街を楽しめるようになってほしい」。

鈴木さんは、航空会社の客室乗務員を目指している。

「車いすの人が乗りに来たら、手伝うことができそうです。幅広い年の人と話せるので、コミュニケーション能力を上げることにもなると思います」

この経験は将来に生きる。学生たちはそう感じている。

(報道部・楠瀬健太)

(高知新聞 2015.10.2 記事より)

「ふくねこ」の風景

高知のタウンモビリティ 6

デザイナーの仲間にも勧められ、半田久子さん(56)が「タウンモビリティシステム」の「ふくねこ」に初めて来たのは、この8月だった。

高知市新屋敷2丁目の自宅から京町商店街までは、車で10分ほどかかる。5年前に脳出血を患い、右半身がまひしている身ごうで「ふくねこ」は近くなが、スタッフにも最初、「別に(一緒に)行きたいところも

目指す「日常」

誰もが支援なしに街へ



来訪者に「ふくねこ」の活動を説明する笹岡和泉さん(高知市はりまや町1丁目)

ないし…」と話していた。それでも、街での時間は思いのほか楽しかったようだ。スタッフと買い物し、カフェでコーヒー。帰る時には「また来たい」と笑顔だった。

「ふくねこ」を運営するNPO法人「福祉住環境ネ

ットワークこうち」理事長の笹岡和泉さん(44)は「まだまだ、一歩を踏み出せていない人はたくさんいます」と話す。笹岡さんも、幼いころから入院と手術を繰り返してきた。「レタミンド抵抗性くる病」で、今も長時間の歩行は難しい。

困っている人を自然に助ける

それでも2級建築士や福祉住環境コーディネーターの資格を取り、障害者や高齢者に優しい住宅づくりに取り組んできた。そうした日々を過ごす中で、こう思うようになったという。

「家の中が住みやすくなっても、住み慣れた地域でその人らしく暮らせないと意味がない」

笹岡さんたちの活動は2010年から始まっている。

最初は、中央公園のイベントでの車いす貸し出しだった。移動に不安がある人も街に出て来ることができるよう、少しずつ工夫を重ねた。タウンモビリティの先進地、福岡県久留米市も視察した。

活動拠点の「ふくねこ」はこの4月に開所したばかりで、課題も多い。登録者が約100人いるボランティアも、常に活動できるわけではない。

笹岡さんの熱弁は続く。「『ふくねこ』は介護施設でもないし、公共サービスでもありません。目指しているのは『日常』です」

誰もが支援なしに街へ出掛け、困っている人がいたら自然に助ける。それが目指す「日常」だ。タウンモビリティには、「街まで出る手段をどうするか」という根本的な課題もある。とりわけ高知県は公共交通網がせい弱な上、低床バスは少なく、車いすで路線バスに乗るには予約も必要だ。

それでも街に出てきてほしい、と笹岡さんは言う。「障害者や高齢者がどんな街に出れば、店でも『リアフリー』とか、動きが生まれます。子どもさんを連れてベビーカーを押している人も、みんなが使いやすい街になるんです」

(報道部・楠瀬健太)

＝おわり

(高知新聞 2015.10.3 記事より)